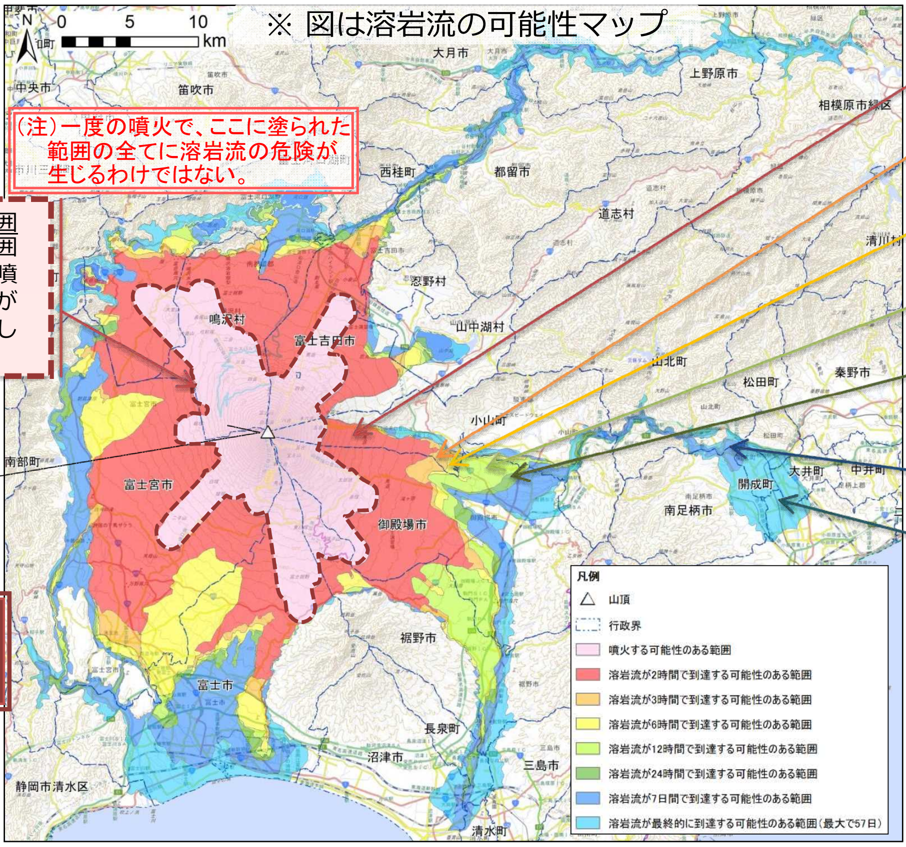
3.

改定後のハザードマップから言えること

3. （１）可能性マップの見方　－溶岩流の可能性マップの例－



<u>噴火する可能性のある範囲</u>
このマップは、この範囲内（破線内）のどこかで噴火が起きた時に、溶岩流が到達可能な最大範囲を示している。

<u>富士山山頂</u>

Check
必ずしも山頂から噴火するとは限らない。

溶岩流が<u>2時間</u>で到達する可能性のある範囲

溶岩流が<u>3時間</u>で到達する可能性のある範囲

溶岩流が<u>6時間</u>で到達する可能性のある範囲

溶岩流が<u>12時間</u>で到達する可能性のある範囲

溶岩流が<u>24時間</u>で到達する可能性のある範囲

溶岩流が<u>７日</u>で到達する可能性のある範囲

溶岩流が<u>最終的</u>に到達する可能性のある範囲

可能性マップとは？

○ 富士山は噴火前に火口の位置が分かりません。そのため、噴火する可能性のある範囲（想定火口範囲）から噴火し、溶岩流等の火山現象が流れ下った場合に、<u>「可能性としてどこまで到達するか」を示したものが、可能性マップと呼びます。</u>

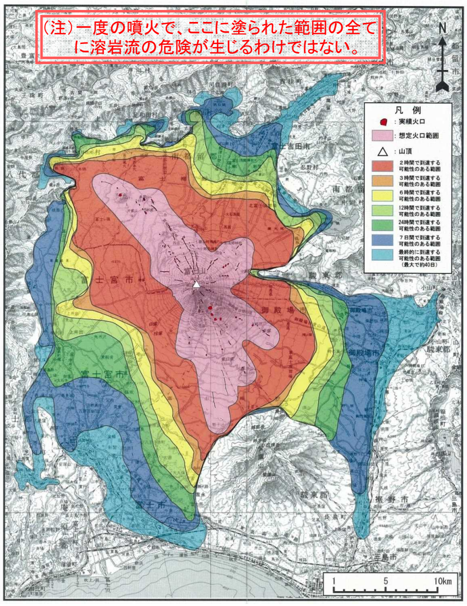
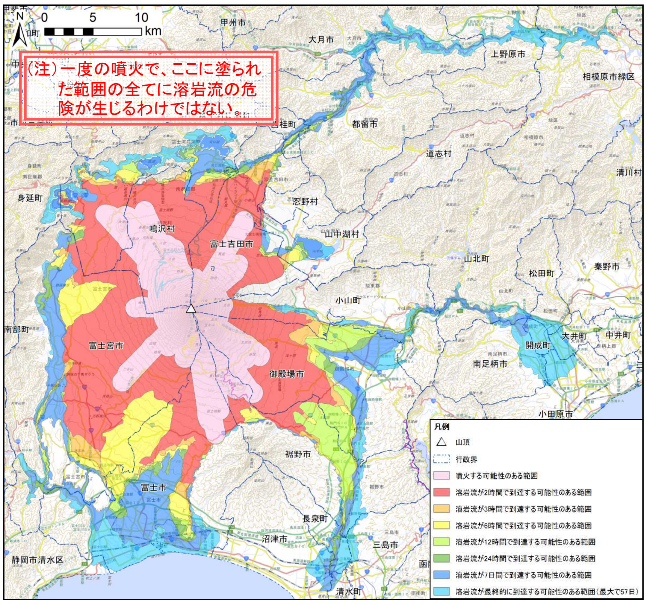
3．（2）溶岩流の可能性マップ

①溶岩流

point

○ 大規模溶岩流の噴出量を現行(平成16年版)の約２倍である13億m^3に変更したこと及び想定火口範囲の拡大や地形データの精緻化に伴い、溶岩流の到達可能性範囲が拡大した。

○ 想定火口範囲の拡大などに伴い、市街地などへの溶岩流の到達時間が早くなった。

（旧） 溶岩流の可能性マップ（平成16年版）	【新】 溶岩流の可能性マップ
	
○大・中・小規模全てのドリルマップを重ねて、規模にかかわらず同一時間区分内に最も遠くまで到達している地点を結んだ包絡線から作成した。	○大・中・小規模全てのドリルマップを重ねて、規模にかかわらず同一時間区分内に最も遠くまで到達している地点を結んだ包絡線から作成した。 ○また包絡線の中に含まれていても周囲を溶岩流が流下する島状の地域は、周囲の到達時間が24時間以内の場合そこに一次避難することは不適であると考えて可能性マップの範囲に含めて塗りつぶし、逆に周囲の到達時間が24時間以上の地域は除いた。

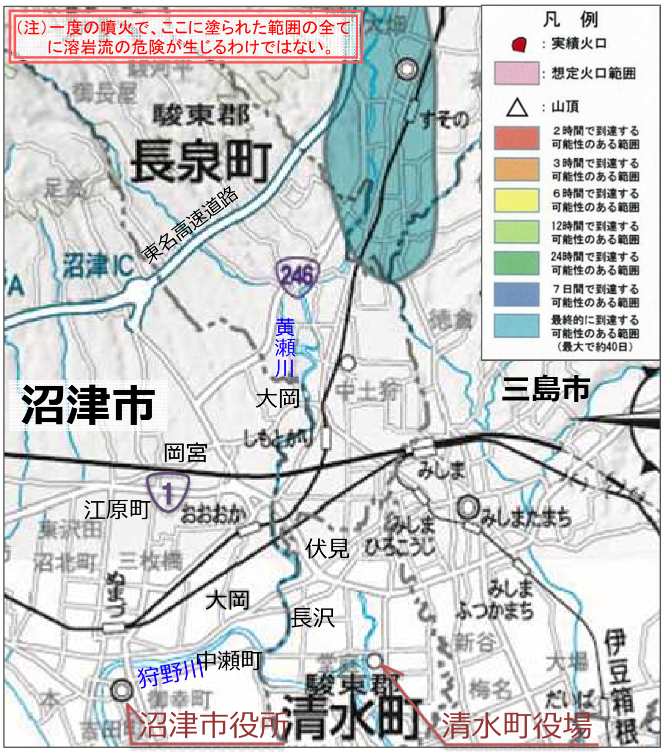
3．（2）溶岩流の可能性マップ

①溶岩流

－沼津市及び清水町及びその周辺域－

point

○ 沼津市及び清水町の特徴としては、地形データの精緻化及び大規模噴火の噴出量の増大により、溶岩流の到達範囲が広がった。

（旧） 溶岩流の可能性マップ（平成16年版）	【新】 溶岩流の可能性マップ
	

（3）溶岩流ドリルマップ－長泉町内を流れるケース－

計算開始点（想定火口位置）
このドリルマップの場合、ここから溶岩流が流れた場合

黄瀬川に沿って溶岩流が流れ下る

全体図

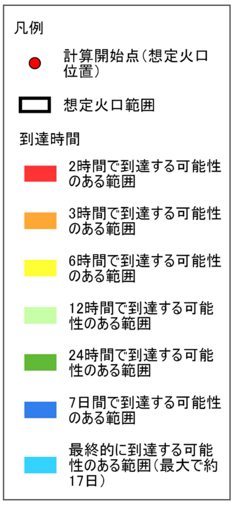
溶岩流が2時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が3時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が6時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が12時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が24時間で到達する可能性のある範囲



溶岩流が7日間で到達する可能性のある範囲

最終的にここまで流れる

point

- ○ 黄瀬川を流下してくる溶岩流が、黄瀬川周辺地区に到達する可能性がある。
- ○ 想定火口範囲の南東端で噴火した場合、溶岩流の到達時間が最も早くなる。

（3）溶岩流ドリルマップ－沼津市及び清水町内を流れるケース－

大規模噴火の溶岩流ドリルマップの一例

計算開始点（想定火口位置）
このドリルマップの場合、ここから溶岩流が流れた場合

溶岩流が2時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が3時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が6時間で到達する可能性のある範囲

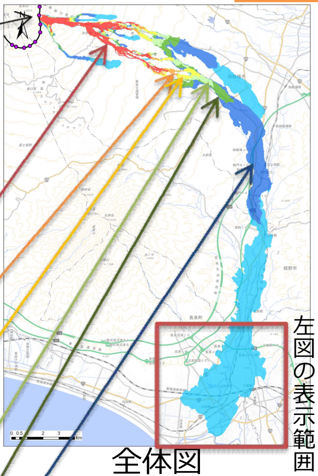
溶岩流が12時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が24時間で到達する可能性のある範囲

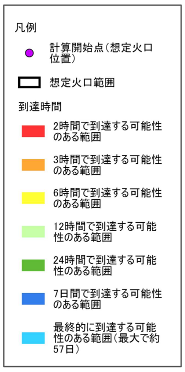
溶岩流が7日間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が最終的に到達する可能性のある範囲

最終的にここまで流れる



全体図



point

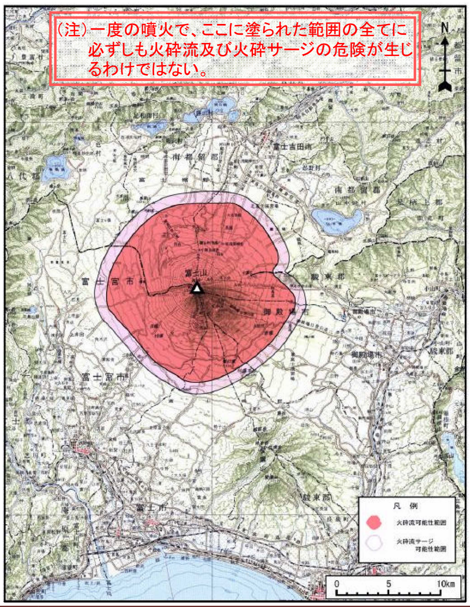
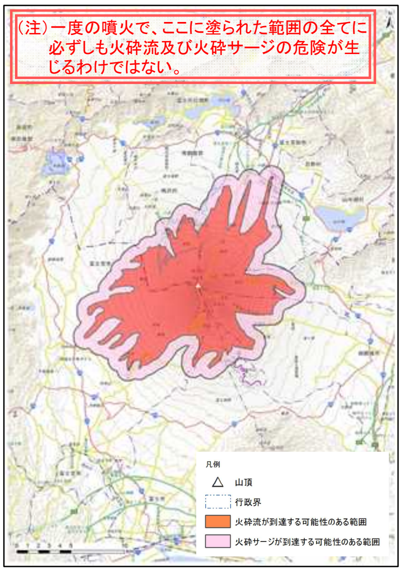
- ○ 大規模噴火の場合、裾合谷を流下した溶岩流が沼津市や清水町にも到達し、住宅地や市街地に広がる可能性がある。

3. （4）火砕流・火砕サージの可能性マップ

② 火砕流

point

○ 火砕流の噴出量を現行(平成16年版)の240万m³から1,000万m³に見直したことや地形データの精緻化に伴い、傾斜の急な北東方向（富士吉田市方面）及び南西方向（富士宮市方面）に、火砕流の到達距離が長くなる傾向となった。

（旧） 火砕流・火砕サージの可能性マップ（平成16年版）	【新】 火砕流・火砕サージの可能性マップ
	
○全てのドリルマップの先端を包絡するように領域を結び、火砕流の到達する可能性のある範囲を作成し、その範囲から１kmの範囲を火砕サージが到達する範囲とした。	○平成16年版と同様に作成し、明らかな尾根地形の陰になるなど火砕流が到達しないとみられる地域は可能性マップの範囲から除いた（周囲を火砕流が流下する島状の地域は、一次避難に不適であることから塗りつぶした）。

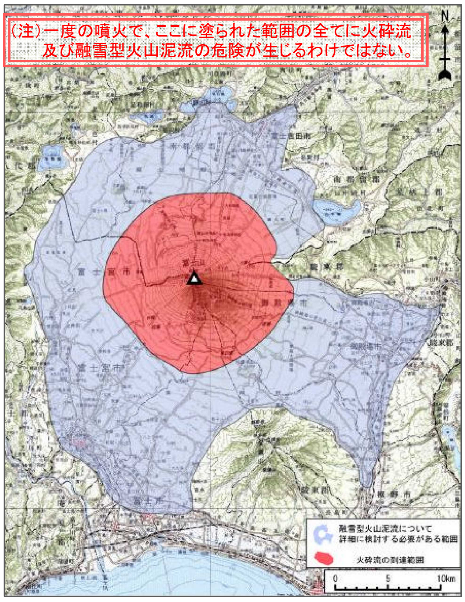
3. （6）融雪型火山泥流の可能性マップ

③ 融雪型火山泥流

point

○ 現行(平成16年版)に比べて、地形の精緻化及びシミュレーションの計算開始点の数を増やしたことにより、可能性マップの影響範囲がより地形の影響を反映した詳細なものとなった。

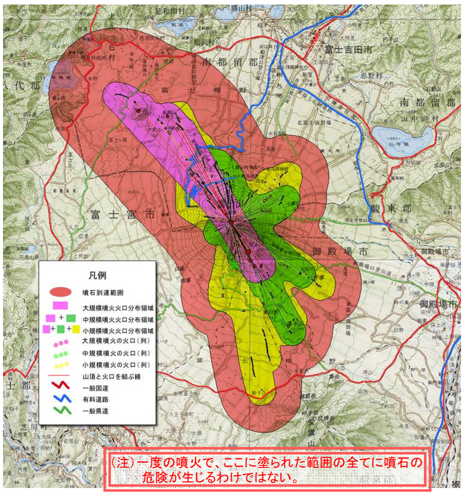
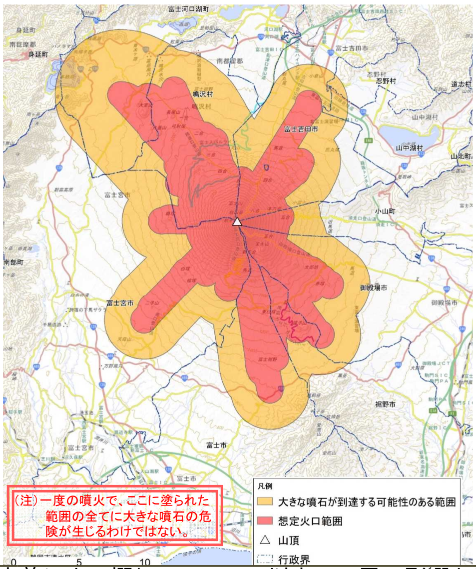
○ 発生原因となる火砕流の想定噴出量の増大や地形データの精緻化に伴い、融雪型火山泥流が大きな河川等を流下し、遠方まで届く結果となった。

（旧） 融雪型火山泥流の可能性マップ（平成16年版）	【新】 融雪型火山泥流の可能性マップ
	
※ 富士山において、融雪型火山泥流が発生した場合に到達する可能性のある範囲を網羅的に示すもの。 ※ ドリルマップを作成していない方向については、他の火山地域における泥流の停止勾配の実績値を基に、斜面勾配２度の地点を停止位置として到達する可能性のある範囲を設定した。	※ 融雪型火山泥流のドリルマップを全て重ね最遠点を包絡線を引いて作成した。 ※ 明瞭な尾根地形の陰となっている部分は到達可能性のある地域から除き、また包絡線の中に含まれていて周囲を融雪型火山泥流が流下する島状の地域は、そこに一次避難することが可能であると考えて可能性マップの範囲から除外した。

（７）大きな噴石の可能性マップ

point

○ 今回の改定により見直した想定火口範囲により、大きな噴石のハザードマップを再作成した。
○ 大きな噴石の影響範囲は、平成16年版と同様、大規模噴火の想定火口範囲から4km、中小規模噴火の想定火口範囲から２kmを包絡する範囲としたが、想定火口範囲の拡大により、影響範囲が山頂から主に南西側（富士宮市方面）及び北東側（富士吉田市・忍野村方面）に広がった。

（旧）　噴石の可能性マップ（平成16年版）	【新】　大きな噴石の可能性マップ
	
※ 空気の抵抗を受けず放物線状に飛ぶ岩塊のうち直径数10cm以上の噴石を対象とした。 ※ 噴石の到達範囲について、以下の条件のにより噴石の可能性マップを作成した。 ・大規模噴火の想定火口範囲の外縁から４kmの範囲。 ・中小規模噴火の想定火口範囲の外縁から２kmの範囲。	※ 気象庁の定義による概ね20～30cm以上の、風の影響をほとんど受けず弾道を描いて飛散する「大きな噴石」をハザードとし、大きな噴石の可能性マップを作成した。 ※ 大きな噴石の到達範囲については平成16年富士山ハザードマップ検討委員会報告書以降、新たな知見が得られていないため、平成16年版と同様、左記の到達範囲とした。